



鷓

衣

上



以<sup>レ</sup>安<sup>レ</sup>永<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>川<sup>レ</sup>里<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>き  
世<sup>レ</sup>樂<sup>レ</sup>精<sup>レ</sup>舎<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>世<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>翁<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>借<sup>レ</sup>抄<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>辨  
と<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>酒<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>り  
侍<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>屋<sup>レ</sup>住<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>り  
あ<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>この<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>え  
金<sup>レ</sup>森<sup>レ</sup>桂<sup>レ</sup>五<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>表<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>窮<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>つ  
か<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>く  
あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>馬<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>り



かやあまの申しに細井喜幸天井  
布川は託してその門人紀六村のうらを  
金本をおくわりのまねりてはけるに  
あまのまじりておのこみは梓の  
命とてあまの世にまじりてあまの  
文よとるや銘をまじてうらあまの  
あまの神をまじりにあまのよく人の  
うらあまの外に託して懸るも乃

百むとひるうらあまの  
てらあまのうらあまの  
あまのあまのあまの  
あまのあまのあまの  
あまのあまのあまの  
あまのあまのあまの

あまのあまの

あはれ〜もあまき米れく〜をあつち  
つ〜るをうつらねとはりよなり  
ふもれ乾あ〜とふ〜ふらふれふ〜  
かくう〜う〜人よ〜は〜  
このま〜

世智

うつらね

奈良園焚



まふよ〜あらの帝の石時い〜ある敷意よあ〜う〜  
此地の名を〜あり〜世〜其道の義〜  
〜も多能い〜あ〜ま〜かれよ〜  
あるの外〜〜一曲〜あるのちあ〜  
腰〜まれ〜公界〜つらふ祓ぢけふもあ〜  
とさひ〜る雲あ〜の生涯あ〜むさる〜桐の葉の家も  
求を〜さ〜のうを〜み豆ぬの枯も宿也〜  
のふよ秋風〜〜ま〜あるを〜あ〜む〜も〜  
乃月偶々紙屑とおぼ〜〜  
地を〜とま〜られ〜冊〜とある扇も〜

我汝を公を申すも汝我子別くもさるるよれ妹姿をある  
うーこ人よかゝるるよりあうま

袴着る日ハやれまはるる園うね

蓼花蒼記

一かゝの芭蕉五株の柳乃其人の徳よたらされく  
枯ぬ名をとくやーもあるに不仕合ある枝木ハある傍正の  
号ヲ呼ぶくはわハ芥子の怒をさるりあは切杭堀池の  
名をさく流ーく我劍冠乃仕途ハ才をさるるあうー一の  
隈家ありこれを蓼花蒼と名つー蓼花ハむつーき  
ハハあられと夕日紅雲の氣を公申くさるりその一か  
乃申りあきあもあうは松茸さよの夢まけを俊成  
々乃をせもあつーく世よさるるさぬれおーけ  
あれをさるるくさるる名とせりさもけ幽栖を何かの郷  
よとありく山よ向い海よさるり河あり舟あり月雪花を  
四の時の詠を供ー時さぬ松の夕風竹の夜雨の音まて  
まくさいとらさるるみとあーきああうは塔市と出く遠  
くーと人多く杖ヲ鞋をわてとら心とさるるさるる方士  
まあハあし出さるるもと端の山ハく教まの門ハ迷ひくさる  
のさあまのさるら化されうけの山さるるのさるるさるる  
あをてさるるい桃源ヲ棹さるるさるるあむさるる梅のさる  
番もあうてさるるさるるさるる今もま入さるる  
あうさるる茅門とあるへーとあり

物をさるるの虫ハきてあけ蓼の花

長短解

大ハやく小を子 經ハ長ふまうまうとあり一世界そのいふ  
多りうと君を答一人を詩くわそよまいとをを演の  
露ふとくへあるハ糸の屋山の屋を引くみる八十七曲  
と従ひまのさるふはくくとあしとあしとあしとあしと  
あふ十八さうけの申さけさふあへて独活の大木の詩  
をのうれを矮雞のまみりきとあしとあしとあしと  
あふまにのとりけり出る杭かいらうとれとけおの益多  
下手れ誤議のとまりうとてふ朝の柳も初どり魚あり  
と女の髪こそとてあしとあしとあしとあしとあしと  
一門も遠さけられ鼻れ下のむいさるハ大木のあし  
かわさきとく其敷の温鈍のあふさとあしとあしとあしと必



あふまにのとりけり出る杭かいらうとれとけおの益多  
てようくむとあしとあしとあしとあしとあしとあしと  
よきいりうとてあしとあしとあしとあしとあしとあしと  
を物さけり世に式法とてあしとあしとあしとあしとあしと  
もあれむとのむつりき境ハ人の製罷あり天地も宿屈  
あふそ長短ハ自然小とあしとあしとあしとあしとあしと  
ハあふに握るを和とあしとあしとあしとあしとあしとあしと  
下さふのあしとあしとあしとあしとあしとあしとあしと  
あしとあしとあしとあしとあしとあしとあしとあしとあしと  
こつとあしとあしとあしとあしとあしとあしとあしとあしと  
洞室をあしとあしとあしとあしとあしとあしとあしとあしと  
久しくとあしとあしとあしとあしとあしとあしとあしとあしと

神をおこし張子りるを瘡よらるるこころこころおひく  
感ありつゝあふ長程の解をつくりてとをむらよの詞丹  
かよ其辞のちとこころいまこ才のみくはあある

本履説

本履、こまの東坡、書の母、けの尻ふちうきおある  
へきにまゝや汝ハ夏の日の宰予、枕ふも雇われさる日お  
つきて隙あつ時ハ椽の下に麻ころい葦のまおあとも  
あひ又ハ麻の杖あさきとく日休の御ふあつきてハ  
こころまてれ月さもんこころひてぬくはまのつな  
こころおさるれくさるに人をあつるもあれと常ハ  
沓あまにひさほつき洗滌の日のこころけとあつてこれ  
よりへの交ハまうとかく下さむのまのあう狩人乃  
笛とあつてハ只あうこころもまとやその麻の命  
を断るハ罪あうまの果あれと傳も下結もあう一本の  
まゆと例の一体のまゆハまゆとて糸の糸緒  
つきれん抑まうまゆとあは履ま結とまゆハけ  
低まこ下結といつるハいつれ一体を分あつてこころま界の  
差別ハあうわと俳諧のこころまの姿と論はへくハ  
あうこころと辞あふ書傳の朝あつて下結くとりそ  
うさるむる雨の夕結あるハ

る羽繪袂貝

蝦蟇の息は虹と起し一層ハよく樓臺と吐後中の虫





とぞへーかゝにうらなせの夫婦とはなりけるれを  
柏木のち葉つもも似せ松木のあゝらぬーま男あゝらぬ  
かもしまりあきみ井さのゆめやうあれい女もら子養も  
形く明られいそく記つとあもねるーをまらうまて  
とらく白らへのまらうまて糊米のまあねぬ中を  
祈いあわささーとちまりるまの比せ<sup>利七</sup>ういとし  
ーあこの持のまら目細うらぬの婆やさーまら昔ハ  
御所よりいらぬの名あも呼あらうあらうーつあのお  
あゝ時ハ走あゆのゆれこらぬらあらうまのりまら  
目ああせーよりまらうまらうま侍あの中まら  
あき同路の口さー出お子の曲りをよりうま名らまら  
色あさく中はあせうまらあけられ茶谷にまらくられ  
あらぬやこまらあうーのまら面とあううあまら  
うら形くー牙をまら物の表さうまらあて買臣まら乃  
耻まらあまらあゝの君れむーまらあつあまら  
うらへまらまらやあらまらあるあまらあまら  
は棚の溜より牙を投げるあまら表さうまらけ換ーまら  
まらあらの婆まらうらうらうらまらあまらあつあまら  
あまらの怒らまらまらまら石漆のあまらあまらあまら  
の中もらまらまら内をまらまら下られまらまらまらまら  
あまら雨ありの役まらまらあまらまらまら長門の涙まら  
隙あまらまらまらまらあまらまらまらまら井戸あまら  
り土あまら津の埋あまらまらまらまらまらまらまら  
ーふらまら形くまらまらまらまらまらまらまらまら

うき申く比あうんるちうた寺の門書まひうられり  
新屋ふかくちられあうちうりあ火新よさぬと  
酒をあうり茶と蒸火くこくこくふうたとカウ  
あやまぬぬ梅もちりくきまきまけク火もらぬ  
ちく灰をさく井あけられ唐らうくくくのと桂  
られくくき目あうさくあはあるへきをさく  
秋のりうとさくつあま指つもの壘塚よとくわ  
果いさるあきま新のまこくくくくくくくく  
園の木の礫とくうりたると

武陽官邸記

百里の海山きりあくこくあう目かこくくく  
起卦りる教よ物のすくくあまそくくくく  
とくは都の月とくく入く森かよきまはく  
みありうるはあまうのあまちうに調度ともく  
つけく常の君ふよ定ちつ庭ハ二之間子穴あ  
乃場そくきくくくくくくくくくく  
一やこのつと<sup>石葉</sup>二もくくくくくく  
我くのく教うのくくくくくくくくく  
あうくくくくくくくくくくくくく  
風鈴ふ反山のまくくくくくくく  
杯一清子のたうあまあまきくくくくく  
く書あうと出くくくかかの新平の浪磨の  
と出くくくくくくくくくくくくく

こつちとにうらまのりこつちと西ありの二階窓西若  
るちうく梢さーあろひくをらひまきまきれとも富士  
あのるにらまきくかきううを根をうみえさうて時  
あつたををあつたさうさうさうなる申さくはまれ  
まあよお念佛題目代待代ありありは木魚のひき  
歯子篇並の佛子あひく建立まぬのうひさうーく  
比丘尼の赤坂よりまれ情を愛くくのまれうくのたを踏  
を引つせけ君の白さくを教照れれくまぬくひま  
よーまみされと心の動へくもあつた隣ハ二階の壁  
をうく朝の火打の音ひくより招神子安縁日も  
たをこまの口のつせくあるも紙帳子園れ持さつある  
まてらるるに木のうくまをわてかこまも又らぬるく  
ありうらるるへー日数するまに促者くわく正始あり  
食之程よとくうらーを柱く紅の秋と縁蔭垣子刀豆  
を這りて壘塚よ夢をさくく新賣の夢とさくある  
あつく不自他のうらーを商人うらーく縁と艾の  
底よ忍をを沼よ味噌桶の似せ銘とさけ山門の如さを  
のう斗くサ范系蝶々忠とわく守の煮豆和物子朝夕の飯  
時とわんく雨のあつりハ火煮るうらとらうくあつま  
恒わのさぬうらうらとれと阿毎の雲とあつて煤排  
のやうはーくむようさうらう一板あつてさうさう世  
ぬきりさうりあるをやうもまきぬのも恒人の公して  
家ハ故々の外もさうらとけをを額子懸くくとい  
事ある人も奥にーさうらるる



乃きまよとわよ大祓のわよのちき鑑もたのしうま御命  
 うらへーや山佛ののちらおぬる比つある 粉雪もたら  
 ちきもあつたも沼の名のこまあつたかとの鑑ハ新お  
 りそのく呼まはるく鑑の世界をあれとあけてもりよ  
 へうらされもよりあれて詩人の沼のこ友よりく入き  
 く李杜もよも鑑の沙流らあつれと友のつ令に俳諧  
 子ハ劉伯倫ののこあつても友が真の鑑は作らるもとも  
 丹俳諧の趣向をあれと我門のハ上戸もあつてく下戸も  
 控さく

鬼傳

山くハ佛のまは作く余利さあつたみー科より天  
 宰人の語よりていさくくく鬼七十八のあつ  
 をより楊妻女の枕ま志ののく詮題とらる 世は男を返れ  
 かくれ義のちも作くくや十師娘も引くれ赤禊よ  
 才代くみくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 ともやまはらあつて涙をくくやあつて朝雄く女の理屈  
 ころりてく先を敬くくくくくくくくくくくくくくく  
 奴の行者の情あつく大早うられのをわする身はれ  
 くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 芥川のくくくくくく鬼一口のあつれ吟詠もむく胃と後を  
 くれのくくくくくく山の色大い山の碎花戸は山ま  
 世にさうありーれ沙流らうは流るも鬼のるもあつて  
 世は踊りよりるもを社りのくくくくく 齋の責

らりたるり出されつめは紫雲の遊戯ふりてくは女津男  
 しこまむいふくしと冥途の生かりしな思きまきく佛のまは  
 しかね起せしち夜の似あつめむられつさるちかくは非り  
 業れ祥目とあつひい言れ火のくま加減とこそ可責乃  
 あつはちか子獄卒とさる地獄の六尺とさるりるお  
 しと癒とれしる天下とうりける民素来乎と泥ひ丹後  
 丹波の境ある城はちね風さくく安達う系のまはち  
 草花とくくくく人さるれと今く棟瓦子付とこの  
 大は陰にくくく下戸と鬼いふち世とさるりる

堀株辞

神僧佛のまをさぬくする中子上げくくは初まりく  
 より下ハ十夜聖のまうき世りり帝の生野のまの口  
 こそく堀株をよとのまいしりりせまうて新くさ  
 きくよりまはちか子せられくゆとては明申く様と  
 こそくやりも唐帝のまを子縋くせて飯時  
 こそねまいしき又いよひまこのまはちありて  
 ちのまはちかひらあてしらす初らちの光とまはち  
 るさりいり代まをまんハ子代破滅のまはち  
 さられせしはちのまはち姑の佛をさりの初起きおを  
 乃さあらしらまはちしむよりこまはちハ火燈子火と  
 ちくまをさしらす株とくすもあれしされて用とさ  
 七株とくまはちわと三四月の終れ子株か滅のまは  
 比ハ初株とく又あしれ目目のまはちまはちあはち



はひあかしの玉丸からく〜とある時ハ隣のやりの耳  
をねとす〜と申すとあるよ商人ハ程朱の説さま  
されとも常は才さ〜しみと細く彼格を大足よこ  
をす〜中ハ殺とられともう〜とある〜とある  
了士取込の氣取ま似〜んある〜へ手ハたら乃  
相言に鞞鼓と威勢を〜とある又ハ歐陽公さま  
より糖と〜とある〜とある〜とある〜とある  
あれ〜とある〜とある〜とある〜とある〜とある  
〜ハ一島の碁取人の名を〜とある〜とある〜とある  
より端を〜とある〜とある〜とある〜とある〜とある  
大強う〜とある〜とある〜とある〜とある〜とある  
碁取ま〜とある〜とある〜とある〜とある〜とある  
碁落のトに〜とある〜とある〜とある〜とある〜とある

ほ〜とある〜とある〜とある〜とある〜とある

偶田川涼賦

あ〜とある〜とある〜とある〜とある〜とある  
川風〜とある〜とある〜とある〜とある〜とある  
ま〜とある〜とある〜とある〜とある〜とある  
あ〜とある〜とある〜とある〜とある〜とある  
も場〜とある〜とある〜とある〜とある〜とある  
あ〜とある〜とある〜とある〜とある〜とある  
の格〜とある〜とある〜とある〜とある〜とある  
神〜とある〜とある〜とある〜とある〜とある



うるへー 柁のあの時日々ー ともらぬめく 幸はなむ  
出帆のまをく 火氣とあそよふと 今戸あり乃  
み 形もともつなと 解系竹をならー てもなきめく  
ようく 物ぬまに 四索の座をなー ころより 意に百艘の  
者ありていそつー ねらひ 謙に 敵軍の 自りも 耻さらへー  
みー しく 諷ハさるハく 人ー して ねをらる 言はれ  
の 金取の あま 花火の 光あみらと 敷ー 幕の 内の子  
学 手 ずよ ありー 船先の けし けし けし けし けし けし  
物 登 草 物 の ちりり ぶと きあ けく 吸 ちりり 握 神  
燭 臺 の きき けし けし けし けし けし けし けし けし  
物 立 似 あり 女 中 の 浴 の 衣 子 二 及 巾 ありー 醫 者 指

ありー しく へと よむ 大 笑 び かり する 奥 あり ありー ても  
形 匠 の いま けい けい けい けい けい けい けい けい けい  
今 日 他 家 の けい けい けい けい けい けい けい けい けい  
うー けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい  
長 系 あり 声 西南 けい けい けい けい けい けい けい けい  
風 名 あり けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい  
勢 子 あり 文 曲 舞 あり あり あり あり あり あり あり あり  
あ ちは 吉 岡 の 様 あり あり あり あり あり あり あり あり  
よー けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい  
ほー けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい  
けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい  
い けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい けい

さうしてわくわくしてあんなにわがわが  
 といふかへりかへりして足海のあな西よあなわあなめくの  
 やわあななななま白き花な帯のさそくこまあなななな  
 う船にうつちちりていりていりていりていりていりていりて  
 のとさくさくさ時の名張しとさくさくさくさくさくさくさくさ  
 くれ

謝を地を辞す

こよらのあなな世の人よ世にてさくさくさくさくさくさく  
 招きいらせてけり園の慶も料らと四の津路も  
 鈴もかへりおなひのあな女はさくさくさくさくさくさくさく  
 さくさくのさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

さくさくさくさくのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
 あなななななななななななななななななななななななななな  
 乃瓜とさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 の内沙もさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 俳諧も信まへさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 町のちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
 他人むきをさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 雨のちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
 とくのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 亭の梁の味のさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 うさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

乃あらむはまはまかちらほつてりよのそ馳走に  
掌傳甲に抱みして葉根咬むる事なまへと  
かゝの風物の方人よふ志結るなり

魚屋りの夢よまに多けき風

襦袢新替

むさしむかりの襦袢をきり比あやの店に求め出せる  
あのありするに當りやほいこ小襦の蓋をりりり  
さん筆ハささく釘の跡のり月あるまゝの糸宛あつ  
りさしりさけらるまのつとあゝとあゝとあゝとあゝと  
りところな独坊をれ佛位とや調へる借金の  
波女の腕とや少くもむきとさきとさうなり

表ハあゝとささくまゝの人よもあゝとささくまゝと  
らせと買えり一歳とありのいふをり一めい  
世に捨袢よまゝと観るまゝとれハ蓋のまゝと  
みいつこまり引まれりらぬまゝと呉襦よらま  
とこいハお長の名にまじりてとあゝとあゝと  
まにあゝとくく人あゝとくくこれとあぢの額と  
まゝ

あまの襦袢に尾葉とある  
そいけり一昔とくく  
よせられ襦の世のぬる  
よ一綴其の袖とあゝと

同菊辞

枯きく——菊れとのつ——と瘦よのつ——とまふか  
 赤きく——あく——白きく——く——きく——菊うり——今や世  
 の多病よか——つれく——美よ——とれ世よあて  
 らせ花ハ年く——あ——く——か——る——を——合——事——と——人——よ——と——を  
 似——傳——と——く——る——の——う——ま——か——の——里——に——う——ら——れ——と——故  
 奥州と何女印まきくをよあてぬ人よあて——世あて  
 るる物よ起すれ——と——い——れ——と——し——よ——と——ら——わ——ら——ぬ  
 け——と——か——と——と——や——ら——る——あ——く——ま——む——と——  
 彭望を益すくあてらるる年の齡よ——と——ち——に——成——り  
 種よあてけ——と——す——万——縁——の——敵——と——あ——い——と——と——癒——人——に——の——ま——  
 このみあてぬ——の——功——と——う——や——し——と——れ——と——花——の  
 こ——う——や——ま——と——し——菊——よ——こ——う——ま——あ——と——し——の——照——か  
 ち——り——し——ま——は——れ——瘦——と——る——や——う——や——し——ま——よ——と——さ——と——を——答  
 こ——と——し——ゆ——と——い——れ——と——く——あ——う——あ——と——と——や——け——と——秋——風——の  
 物——ら——ぬ——花——と——と——う——あ——つ——と——せ——ら——る。

我菊や尺より山に花のさかす

俳序と控

一 飯ハと名れ控はさるへ——

茶の花の比とちる茶も葉をうね

一 汁一つ葉一つ酒の肴と——と——酒——く——く——輕——子——移——る——乃  
 外——と——の——う——と——へ——と——な——い——ふ——茶——め——を——用——ひ——豆——腐——ハ——と——香——み  
 ころるへ——と——香——の——お——ハ——論——ら——る——に——と——し——て

春の香もせめて豆府間の冬を記

一 酒ハ後のあ後をさへくく不盡をさへくくはさるる  
盃ハ始をさへくくをさへくく

いさめに酒をさへくく一 村一々れ

斗ハ酒をさへくくありてはさの持をさへくく  
くさへくくさへくく一 句とさへくく

狐ハくさへくくとさへくくまねおろけ

一 菓子ハその白のあまに銀をまつハお火豆は定む一

お火豆は春こそませくくはくさへくく

一 燈ハ灯灯をさへくくさへくく一

燭燭ハくさへくくさへくくさへくく

右へさへくくさへくく一 高きに界下の辯

おれをさへくくに野原の接打し古一 けやへくくとさへくく  
さへくくとさへくくとさへくくははの世辯とさへくく  
く風物に不信第一の人とさへくく一

さへくくとさへくく

おれをさへくくとさへくくとさへくく

美人傳

天子信天翁あり地ハあまあらよとらよあれと人  
ふいけのこありての世にら一 ありさへくくとさへくく

世中ハ初より一 けはあまの心さへくくとさへくくとさへくくと  
さへくくとさへくくとさへくくとさへくくと

さへくくとさへくくとさへくくとさへくくと

とより多きを何れの大ねに大きにけりまじりて  
おろきの義人と云せりるより世にあらまの義人と  
よきものなむいされいけいのかはりの義人ありてあり  
うとてい義人と云はれしやよきこと

病もや樂起てや安まをせ行

爰辨

帝分のおの室あ廿一年のまを候より一富士二層  
乃不定もことせりる初ねのありて唐人の年ふ  
日本人の病言ちりてされもあれ得失をとりまの  
邯鄲の棧はあり古れをまにいつに棧とありて  
漆園よりあれ棧はいつに棧とありて棧國はありて

雲北上人はま玉のおの衣とていしに記しに乃  
ともいへむらんあまうまれ神もかきらに  
んまの神も七十満るらけこの松上はあま  
たせまのなるかろきんもまれ告げ佛はいつあれ  
例の世とてあまて爰初泡乾のこことより人  
現もあれ神も入て世中とてあまていれ  
ともあま現のありしものはあまを現に  
と起ていしと初ていしとあま十年の月日を  
りるも百年の算用ふあまはまを鬼神も  
形一似城もまて形一聖人もあま形一といつ  
世に誰か定やると鬼神はいつとありて似城も  
つて候とていしと聖人もありは何ともいし

さういふ冷やも熱もなほあつちからあつちから  
あつちからあつちからあつちからあつちからあつちから



